

県道日出真那井杵築線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

真那井城山遺跡

2002

大分県教育委員会

県道日出真那井杵築線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

真那井城山遺跡



洞穴全景

序 文

日出町のある国東半島はつい最近まで交通の便の悪い、「陸の孤島」と称された地域でした。しかし、そのような「陸の孤島」は、ごく最近の感性で語られたに過ぎなかったということは、歴史遺産を見れば明らかであります。

古来山岳部では仏教文化が栄え、海岸の狭い平野では細々と農業を営むとともに、沿岸部の漁業が盛んでした。人々の営みは多様な自然に適応し、国東半島の至る所にその痕跡を残しました。今般、報告のなされる真那井城山遺跡は、まさにそのようなことを雄弁に語る遺跡であります。自然に浸食されて形成された洞穴を、後世幾度と無く利用している姿が明らかになりました。海岸部の洞穴遺跡は大分県では初めての発見、調査であります。

この報告書が、新しい歴史を記述する資料となり、皆様方に広く利用されますならば、幸甚に存じます。また、最後になりましたが、調査にあたりご協力いただいた多くの方々に御礼申し上げます。

平成14年3月29日

大分県教育委員会教育長

石 川 公 一

例 言

1. 本書は、大分県土木建築部別府土木事務所が施行した県道日出真那井杵築線道路改良工事に伴い調査を行った真那井城山遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、別府土木事務所の依頼を受けて、大分県教育委員会が実施したものである。
3. 遺構の実測、現地での写真撮影は調査員が行い、遺物の写真撮影は友岡信彦・山崎文子（大分県文化課）が行った。
4. 空中写真は有限会社スカイサーベイが行った。
5. 第3章の分析・執筆は山田拓伸（大分県立歴史博物館）が行った。
6. 第3章を除く本書の執筆、編集は小柳和宏（大分県文化課）が行った。

目 次

第1章 はじめに	
1. 調査に至る経緯と調査の経過	1
2. 調査組織	1
3. 遺跡の立地と環境	1
第2章 調査の成果	
1. 調査の概要	4
2. 城山調査区	4
3. 洞穴調査区	6
(1) 第1号洞穴	6
a. 概要	6
b. 堆積状況	9
c. 遺構と遺物	10
1) 遺物出土状況	10
2) 洞穴内の埋拵遺構	12
3) その他の遺構	13
4) 出土遺物	13
(2) 第2号洞穴	22
a. 概要	22
b. 出土遺物	22
第3章 分析	26
第4章 まとめ	32
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	調査区位置図	3
第3図	稲荷社周辺出土遺物	4
第4図	城山調査区出土遺物	5
第5図	城山縄張り図	5
第6図	洞穴調査区平面図	6
第7図	第1号洞穴平面・立面図	7
第8図	第1号洞穴土層断面図(1)	8
第9図	第1号洞穴土層断面図(2)	9
第10図	第1号洞穴遺物出土投影図	10
第11図	第1号洞穴遺物出土位置図	11
第12図	第1号洞穴埋葬部遺物出土状況	12
第13図	第1号洞穴出土遺物(1)	14
第14図	第1号洞穴出土遺物(2)	15
第15図	第1号洞穴出土遺物(3)	16
第16図	第1号洞穴出土遺物(4)	17
第17図	第1号洞穴出土遺物(5)	18
第18図	第1号洞穴出土遺物(6)	19
第19図	第1号洞穴出土遺物(7)	20
第20図	第1号洞穴出土遺物(8)	21
第21図	第2号洞穴平面・立面図	22
第22図	第2号洞穴出土遺物(1)	23
第23図	第2号洞穴出土遺物(2)	24
第24図	第2号洞穴出土遺物(3)	25

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景
図版2	第1号洞穴完掘状況，第1号洞穴遺物出土状況
図版3	遺跡空中写真，城山地区調査前，城山地区表土はぎ
図版4	城山地区塚状の高まり，第1号洞穴調査前の状況，第1号洞穴調査風景
図版5	第1号洞穴調査風景，第1号洞穴，第1号洞穴セクションaの中程の状況
図版6	第1号洞穴セクションc，第1号洞穴セクションg，第1号洞穴最奥部遺物出土状況
図版7	第1号洞穴完掘状況，第1号洞穴完掘状況（洞穴内から），第2号洞穴
図版8	出土遺物
図版9	出土遺物
図版10	出土遺物
図版11	出土遺物

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯と調査の経過

県道日出真那井杵築線の平成9年度道路工事予定箇所の通称「城山^{しろやま}（白山）」と呼ばれる小高い独立丘陵において、県文化課で文化財の分布調査を行った。その結果、「城山」には塚状の高まりが認められ、さらに「城山」という地名から「城郭」の可能性も考えられたので、発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、台地上の平坦面の表土を除去し、遺構の検出から始めた。しかし、平坦部は削平が著しく、遺構は検出されなかった。また、古墳状の高まりは、トレンチを設定して断面の確認と遺構の検出に努めた。その結果、高まりは削り出しによっており、頂部の神社建設に伴うものである可能性が高まった。

一方、丘陵の裾部には間口約3mで、天井までの高さ約50cmまでゴミが堆積している洞穴が確認されており、何らかの遺構がある可能性があると考えられたため、内部のゴミの除去からはじめ、半裁して掘り下げを行った。その結果、中世の土器が出土し、遺跡となる可能性がでてきたので、本格的な掘り下げを行うこととしたのである。以下は簡単な経過である。

平成10年	8月25日	調査（測量）開始
	9月7日	重機により「城山」部分の表土剥ぎ開始
	9月29日	洞穴部分の掘り下げ開始
	10月6日	第1号洞穴から土器出土、遺構であることを確認
	10月17日	台風10号により、洞穴調査区水没、土層観察土手一部崩壊
	11月13日	第2号洞穴掘り下げ開始
	12月8日	空中写真撮影
	12月24日	調査終了

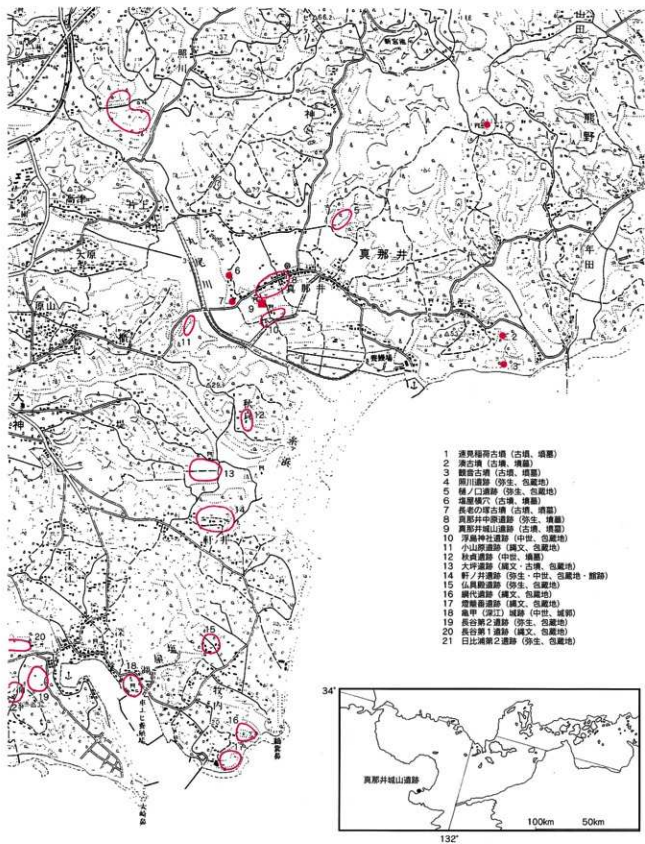
2. 調査組織

調査の組織は次の通りである。

調査事務	河野孝一（大分県教育庁文化課課長補佐兼管理係長）
	石堂喜久次（　　　　　　主査）
調査担当	清水宗昭（大分県教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財第二係長）
	高橋信武（　　　　　　副主幹）
	栗原　真（　　　　　　主査）
	小柳和宏（　　　　　　主査）
	若杉竜太（　　　　　　嘱託）
	豊田徹士（　　　　　　嘱託）

3. 遺跡の立地と環境

遺跡は瀬戸内海に突き出た国東半島の南の付け根付近にある速見郡日出町大字真那井字塩屋通称城山（白山）に所在する。真那井は海岸に隣接し、丸尾川と年の神川によって運ばれた土砂によって遶浅の海岸が形成されている。塩屋遺跡のある真那井の集落のある部分は、東西に連なる砂丘部分で、弥生時代以前はそこから南側、すなわち海側は城山の丘陵と浮島神社がある微高地になっ

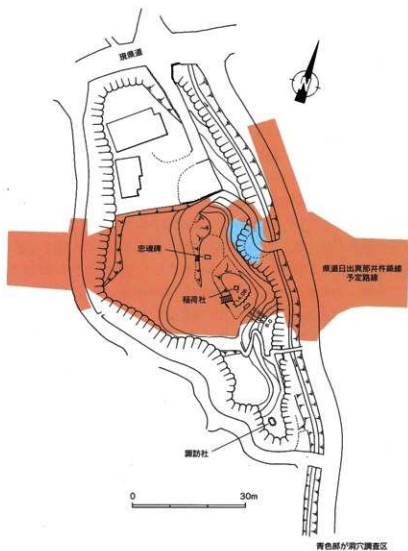


- 1 透見稲荷古墳 (古墳、墳墓)
- 2 津古墳 (古墳、墳墓)
- 3 観音古墳 (古墳、墳墓)
- 4 開川遺跡 (弥生、包蔵地)
- 5 樋ノ口遺跡 (弥生、包蔵地)
- 6 堀屋塚穴 (古墳、墳墓)
- 7 養老の塚古墳 (古墳、墳墓)
- 8 真那井中沢遺跡 (弥生、墳墓)
- 9 真那井城山遺跡 (古墳、墳墓)
- 10 浮島神社遺跡 (中世、包蔵地)
- 11 小山原遺跡 (縄文、包蔵地)
- 12 秋良遺跡 (中世、墳墓)
- 13 大呼遺跡 (縄文、古墳、包蔵地)
- 14 新ノ井遺跡 (弥生、中世、包蔵地・竊跡)
- 15 仏具師遺跡 (弥生、包蔵地)
- 16 竊代遺跡 (縄文、包蔵地)
- 17 鹿嶋遺跡 (縄文、包蔵地)
- 18 島甲 (深江) 城跡 (中世、城郭)
- 19 長谷第2遺跡 (弥生、包蔵地)
- 20 長谷第1遺跡 (縄文、包蔵地)
- 21 日比瀨第2遺跡 (弥生、包蔵地)

第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

た部分のみが陸地を形成し、他は海水が入り込んでいたと思われる。実際、浮島神社から海側は江戸時代以来干拓事業が進められており、つい最近まで塩田として利用されていた。（『日出町誌本編』『日出町の生活と文化』に真那井についての詳細な分析があるので参照のこと。）

遺跡の所在する城山の丘陵は、頂部の最も標高の高い部分が14.08mで、上部の平坦地は概ね南北に120m、東西30mの広さがある。上部平坦面は、調査区外も含めて4段の平坦地からなり、調査対象となった真ん中の平坦地が最も広く、次いで北側が広く、南側は小さな2段の平坦地となる。丘陵の北側は、現県道日出真那井柵築線によって切られており、当初は北側から続く丘陵の先端部ということになる。



第2図 調査区位置図

周辺に目を転じると、縄文時代以前の遺跡は少ないが、弥生時代になると海岸の砂丘上で中期の箱式石棺が発見され、さらに浮島神社には真那井と大神の境付近で発見されたとされる広形銅鉾が7本奉納されていた（現在は所在不明）。また、現集落ののる砂丘上も弥生時代の遺跡である。このように、弥生時代になると海岸部の活発な活動を見ることができる。

古墳時代になると、国東半島は沿岸部を中心として大分県内でも小規模な円墳が多く築かれる地域であるが、この地にも城山遺跡の付近に石棺の露出する長老の塚古墳などが点在する。

古代は速見郡大神郷に属し、その後宇佐宮弥勒寺領浦部十五庄のひとつとなり、中世鎌倉時代には大友一族の「利根頼親」が地頭職を帯す大神荘（170町）となった。その内、真那井は「真奈井、野木乃井之村」30町として、現在真那井の南1.5キロほどにある軒の井と一緒に把握されていた。そして、「真那井衆」と呼ばれる水軍として、大友氏に掌握されていた。

ところで、遺跡に隣接する浮島神社は『豊後速見郡史』によると「村社浮島八幡社 祠は初め大神村真那井白山（或いは城山と云う）に鎮座せしを、中古海浜浮島に遷せしなり」とあり、もともと今回の調査地であった城山に鎮座していたとされる。いつ頃遷座したのかは不明であるが、現在の境内地に中世の土器が多量に散布している状況を考えれば、中世段階ですでに現在地にあったものと考えられる。

第2章 調査の成果

1. 調査の概要

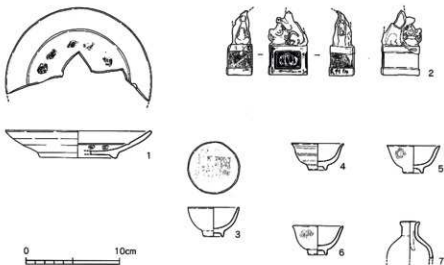
調査区は大きく2箇所に分れる。1箇所は城山丘陵の上面平坦面（城山調査区）で、もう1箇所は丘陵裾部の洞穴部（洞穴調査区）である。

前者は、「城山」という地名に表される如く、中世城郭の可能性が考えられる地区であった。標高は10mあまりで、水田面からの比高差は7mほどに過ぎない。いわゆる「山城」の立地ではなく、「丘城」または「館城」と呼べる立地であるが、結果的に平坦面では遺構の検出はなかった。ただし、丘陵の南端の郭状の段差や、平坦面北東側の掘り残し土塁と考えられる高まりなど、「城」の可能性もあるが、今回の調査では確定できなかった。

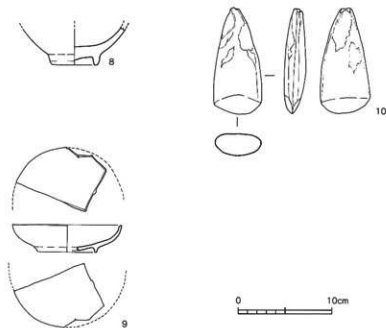
丘陵裾部の洞穴部では、計2基の洞穴の調査を行った。第1号洞穴は、ほぼ埋没していたが、調査の結果、開口5mで高さ3mの海蝕洞穴で、古墳時代と中世の2時期に何らかの形で利用されたことが明らかになった。第2号洞穴は、後世道路により前面を掘削されているが、幅4.8m、高さ1.5m、奥行き1.2mが確認された。標高は1号より低く、海蝕洞穴と考えられるが形成された時期が異なるかもしれない。遺物としては、第1号洞穴の前庭部の陥没箇所から流れ込んだと考えられる中世と古墳時代の遺物が出土している。

2. 城山調査区

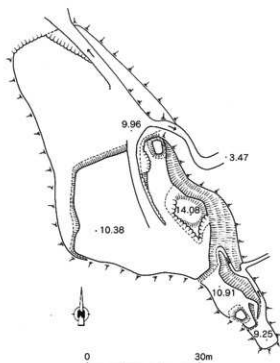
台地上面は、北側半分には民家があり、南側半分の東側は塚状の高まりがあり、忠魂碑や稲荷社などが並び、細くなった南端には諏訪社が祀られていた。調査は、塚状の高まりが古墳である可能性を考え、トレンチを入れ掘り下げた。その結果、高まりは地山の掘り残しで、まったく盛り土はなく、中心主体も確認されなかったため古墳ではないと判断した。しかし、第3図1から7の遺物が出土している。おそらく稲荷社に伴うものと考えられる。1は胎土目の残る白磁皿。16世紀から17世紀前半の朝鮮製。2は磁器の狐像で、19世紀前半から中頃の肥前色絵。3から6は小杯、7は徳利である。小杯、徳利とも昭和のものと思われる。



第3図 城山地区稲荷社周辺出土遺物



第4図 城山地区出土遺物



第5図 城山縄張り図 (S=1/1,000)

また、西側の平坦面は全面表土剥ぎを行ったが、遺構はまったく検出されなかった。かなり上面が削平されていると考えられる。この「城山」を中世城郭として見た場合、第5図のような縄張り図となる。しかし、中央部の平坦面を全面表土剥ぎを行ったにもかかわらず、何も検出できなかったことから、城郭の可能性は少ないと考えるが、南側に延びる丘陵先端には曲輪状の段も認められる。しかし、この段も諏訪社の石祠があり、曲輪と断定はできない。稲荷社があった塚状の高まりは、豊後地域では丘陵片側へ削り残り土塁を持つものがあり、それとの類似を指摘できる。結論的に言えば、この城山を城郭として見た場合、西側から南側にかけて急崖によって天然の要害をなし、東側に土塁を設け、主に東方面の守りを重視していたことが窺えることになる。

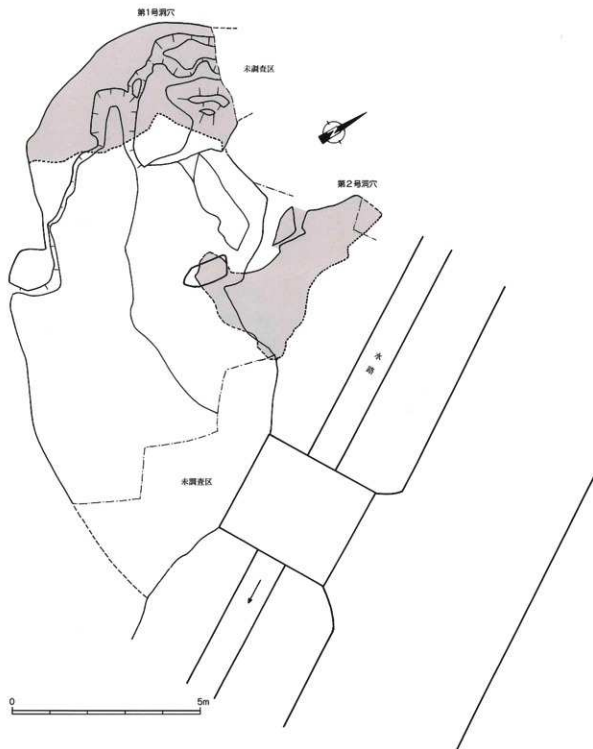
遺物は土器の小破片以外は8の青磁と9の白磁、10の磨製石斧がある。8は14世紀から15世紀の龍泉窯青磁。9は16世紀後半から17世紀前半の中国景德鎮磁器皿。

3. 洞穴調査区

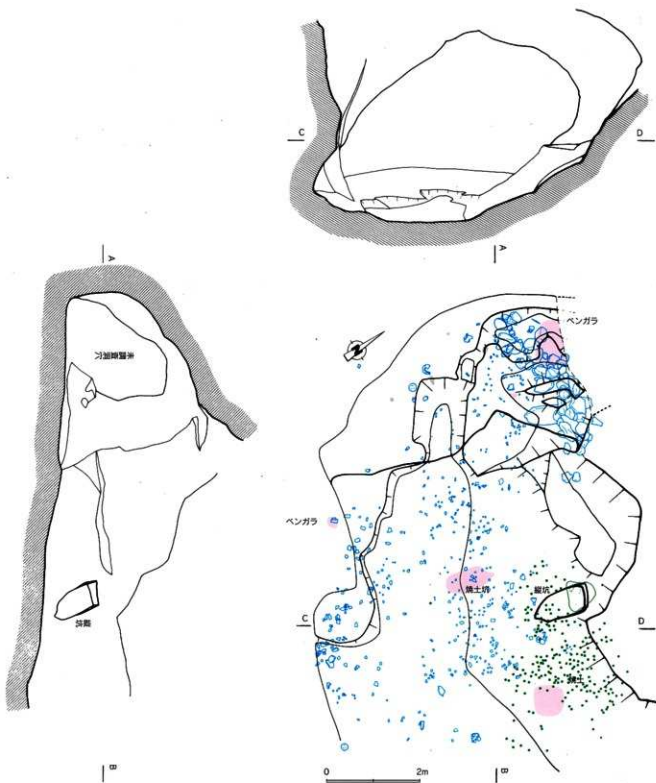
(1) 第1号洞穴

a. 概要

間口3mほどで、当初からわずかながら開口していた。しかし、天井まで50cmほどの所までゴミが堆積しており、奥行きも1mほどしか確認できない状況であった。結果的には間口5.3m、入り口部の天井までの高さ2.8m、奥行き3.3mほどの洞穴と確認された。



第6図 洞穴調査区平面図 (S=1/100)

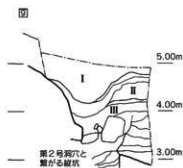
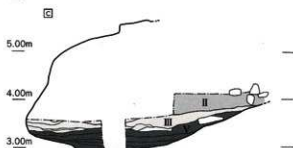
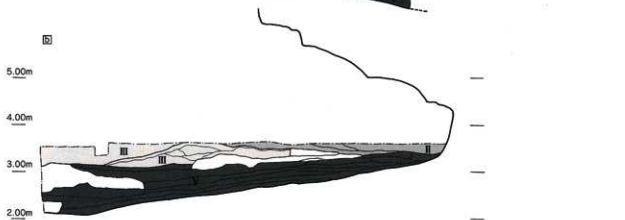
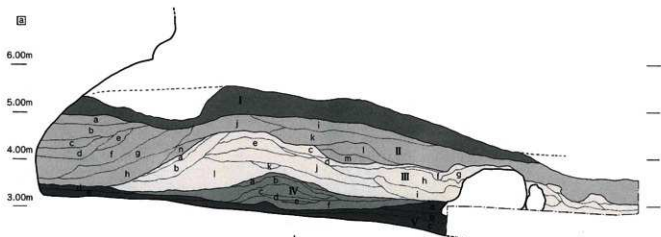


第7図 第1号洞穴平面・立面図 (S=1/80)

■ 炭化物
 緑のドットは中世土器

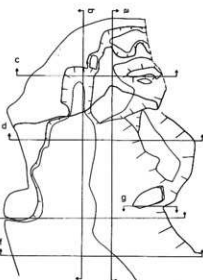
洞穴の床面標高は3.2mで、縄文海進に伴う海蝕洞穴とすることができる。洞穴の内部は北側が調査区外で確認できなかったが、幅2.3mで高さ2.0mほどの洞穴が続いているのが確認された。

洞穴は、横穴墓のいわゆる「前庭部」に相当する部分は現状で天井が無いが、堆積の状況か

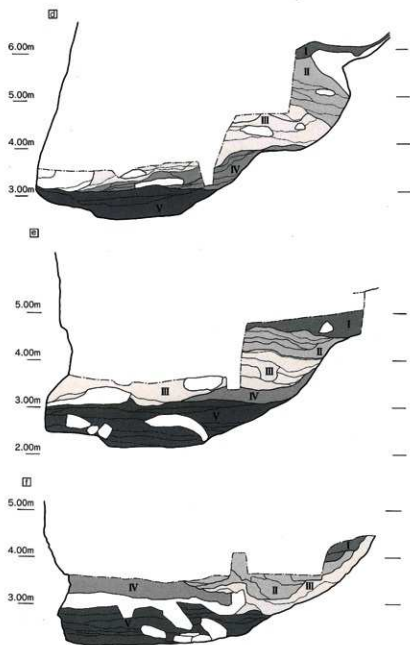


- | | | | |
|---------|------------------|------|------------------|
| I | 灰土層 (茶褐色土) | h | 赤茶褐色粘質土 |
| II a, b | 砂層 | i | 黄灰色土、礫・地山ブロック含む |
| c | 砂質土層、明黄灰色土 | j | 緑黄灰色土 |
| d | 砂質土層、小さな礫含む明黄灰色土 | k | 明黄灰色土 |
| e | 明黄灰色土 | l | 明茶褐色土 |
| f | 2~5cmの礫含む黄灰色土 | IV a | 暗茶褐色土、炭多層に含む |
| g | 明黄灰色土 | b | 黄褐色土 |
| h | 3~5cmの礫含む明黄灰色土 | c | 暗茶褐色土 |
| i | 茶褐色土・中世土器含む | d | 明茶褐色土、灰色粘土ブロック含む |
| j | 暗褐色土 | e | 赤褐色粘質土 |
| k | 明茶褐色土・中世土器含む | f | 暗茶褐色土 |
| l | 茶褐色土 | V a | 明茶褐色砂 |
| m | 明黄灰色土 | b | 赤褐色砂 |
| n | 茶褐色土 | c | 白色砂 |
| III a | 暗褐色土、焼土含む | d | 赤褐色砂 |
| b | 茶褐色土 | e | 灰褐色砂 |
| c | 暗褐色土 | | |
| d | 暗褐色土、焼土・炭源り | | |
| e | 明黄灰色土、バザンバサ | | |
| f | 赤茶褐色、白色粘土ブロック含む | | |
| g | 暗茶褐色土、バザンバサ | | |

白抜きは地山の岩盤が崩落したもの



第8図 第1号洞穴土層断面図(1)

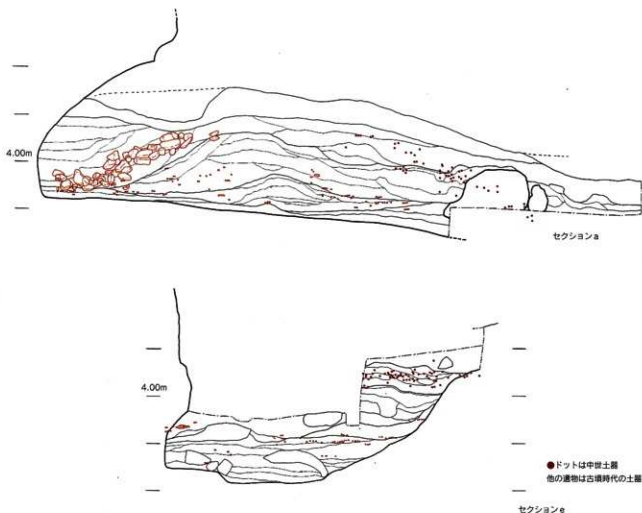


第9図 第1号洞穴土層断面図(2)

ら本来は底程度の天井が形成されていたと考えられる。前庭部の平面形は、「く」字状に折れ曲がり、東側が平野部（海蝕時には水際部）に向けて開いている。また、前庭部北側の斜面部には第2号洞穴につながる穴（縦坑）があいている。

b. 堆積状況

洞穴の堆積状況は第8、9図のとおりである。表土層から最下層の砂層まで大きくは5層に分かれる。第I層は江戸時代から現代までの遺物を含む表土層で、特に洞穴内部には多量のゴミが堆積していた。第II層は中世の堆積層で、洞穴内部は床面近くまで厚く堆積していた。第III層は古墳時代前期の土器を含む層で、炭混じりの焼土が表面近くで認められた。特に洞穴入り口付近は1m近くの盛り上がり認められる。第IV層は古墳時代前期の土器を含む層で、特に東側からの堆積が多く認められた。第V層は砂層で、間に落下した岩盤を含み、厚いところで1.5m、洞穴内部で20cmほどの堆積が認められたが、基本的に水平に堆積している。第V層



第10図 第1号洞穴遺物出土投影図

中からは基本的に遺物の出土はない。

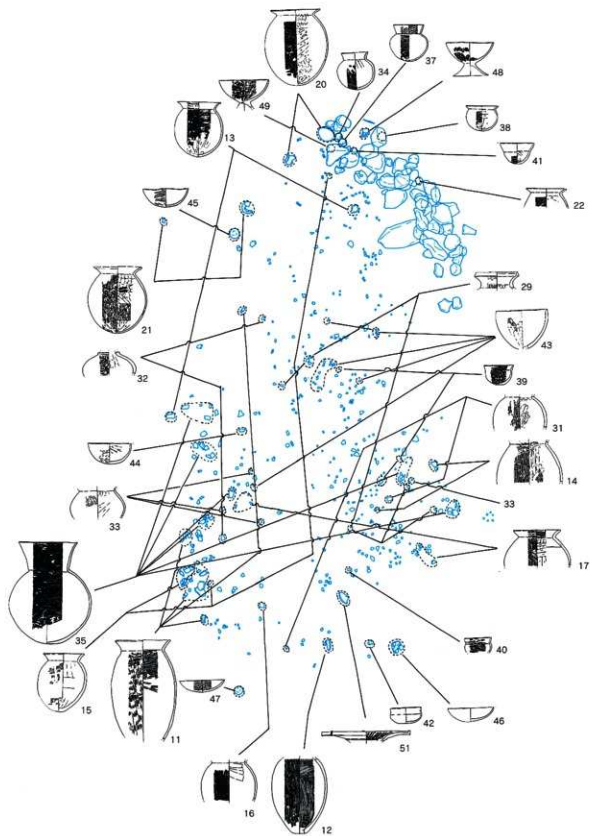
堆積状況をさらに詳しく見てみると、洞穴内部では砂層（Ⅴ層）の上面に古墳時代の層（Ⅲ、Ⅳ層）の堆積は薄く、中世に多量の砂層（Ⅱ層）で埋まっている。土層の平面的な広がりを見ると、第Ⅴ層（砂層）は洞穴内部から前庭部までほぼ水平に堆積しているが、Ⅱ層からⅣ層は、基本的に東方向からの堆積が主流になる。このことは、前庭部に西側から庇状の突出部があり、土砂の堆積を妨げていたのに対して、南側は、（現在は道路により削平されているが）自然の丘陵の斜面につながっていたからであると思われる。

c. 遺構と遺物

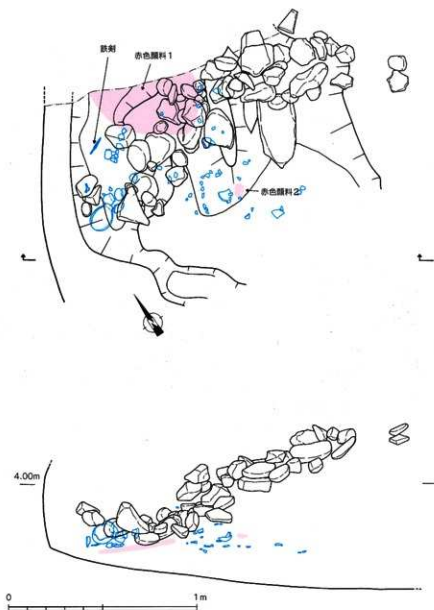
1) 遺物出土状況（第10、11図）

古墳時代の遺物は、第11図に見るように、洞穴内およびその前庭部から若干のまとまりを持ちながらほぼまんべんなく出土している。出土層位は第10図にみるように、第Ⅲ層、Ⅳ層からの出土である。しかし、基本的には第Ⅳ層上面に沿って出土している状況が窺われる。第Ⅳ層は洞穴奥部から約5mほどのところで1mほど盛り上がり、それに沿うように出土している。しかし、第Ⅳ層中にも遺物が入っているのは確実であり、出土遺物にもほとんど時期差が認められないことを考えれば、第Ⅲ層とⅣ層はあまり時期を置かずして形成されたものと考えられる。

正誤図
(11ページと差替え)



第11図 第1号洞穴遺物出土位置圖



第12図 第1号洞穴埋葬部遺物出土状況

一方、中世の遺物は第10図のドットで示したように第Ⅱ層中に含まれる。掘り込みは確認されず、散布された状態であったが、上下方向に数十センチの幅があり、複数回の散布の結果である可能性が高い。

2) 洞穴内の埋葬遺構（第12図）

洞穴内最奥部で完形に近い土器6個体と鉄剣、ベンガラが集中的に出土した。土器には20、21、36、37に見られるように胴部に焼成後穿孔が認められ、さらに副葬品としての鉄剣、墓に伴うことの多いベンガラが集中していたことから埋葬があったと判断した。しかし、棺や掘り込みなど直接的に埋葬を示す遺構は確認できなかった。

見通し図（第10、12図）で見ると、これらの土器や鉄器は第Ⅴ層直上に置かれたように出土しているのがわかる。さらにその上部には直接第Ⅱ層が乗っている。つまり、土層から判断する限り遺体は砂層（第Ⅴ層）の上に掘り込まれることなく置かれ、その後しばらくはそのままの状態、中世になってその上に礫と砂層（第Ⅱ層）が堆積したものと考えられる。

3) その他の遺構

セクションdの南側、壁際に掘り込みが認められた。この部分にはベンガラも認められ、埋葬のあった可能性が高い。第Ⅲ層から掘り込まれた可能性が高く、床面は第Ⅳ層上面に達している。遺物では特に副葬品に相当するようなものは出土していない。平面的には確認できなかった。

また、洞穴内部で、第7図に灰色の網掛けで示すように、4箇所の小さな炭化物の集中箇所が認められた。何れもⅣ層中のものである。

洞穴前面の第Ⅱ層中で2箇所の焼上のまとまりを確認している。特に洞穴に近い方は被熱で硬化した状況であった(焼土坑)。いずれも中世のものである。

4) 出土遺物

第13図11から第20図98までが第1号洞穴出土遺物である。ただし、古墳時代の土器については第2号洞穴からのものも入っているが、すべて連結坑(縦坑)から転落したものであるので、一括で扱う。

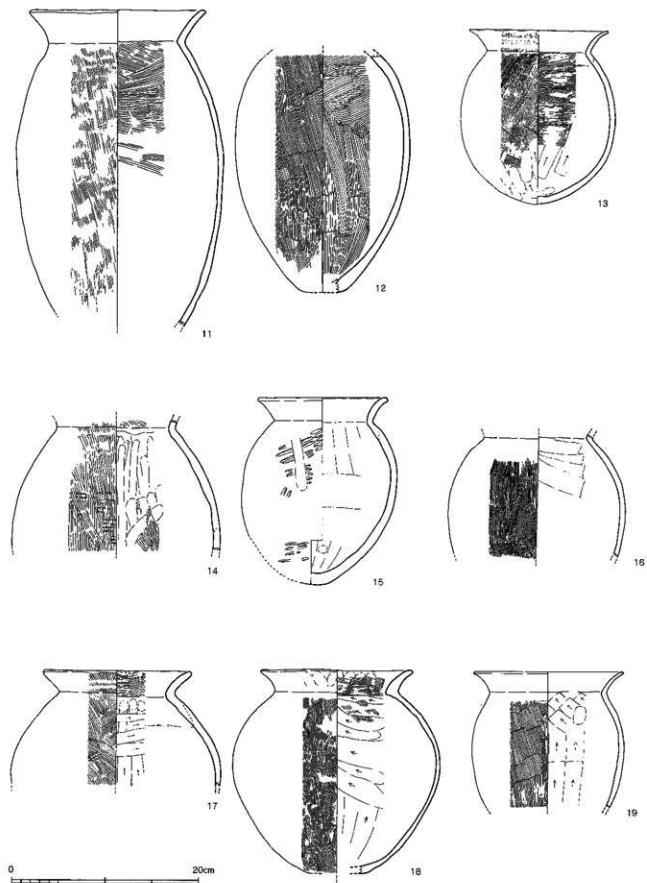
11から23は甕。11と12は長胴で弥生時代後期後半の土器様相を強く引きずる。13から19は在地系の甕で、胴部を球形にし、外來の影響から内面ヘラケズリや外面にタタキを有するものがあるなど、11や12からの展開を考慮することができるものである。20から23は口縁端部を小さく摘み出すもので、畿内布留式土器の影響を受けている。24から30は複合口縁壺である。いわゆる安国寺式土器と呼ばれる在地系の壺は24から28で、24、25の口縁部の形状や波状文の様相から古墳時代に下ると考えられる。しかし、一方28の平底と胴部に3条の突帯を巡らせるものは弥生時代後期で納まるものであるが、28が洞穴の埋没課程で上部から混入したものであることを考えると(第9図下の説明)、この時期洞穴利用があったと考えるのは難しい。29から30は他地域の複合口縁壺である。32から34は小型の甕。32は頸部に1条の突帯を有する。35は大型の直口壺。36、37は小型の直口壺。38から47は碗、小型丸底壺である。41の小型丸底壺は口縁部が大きく広がる。42は類例が少ないが、同時期の碗である。43はやや大型の碗、46と47は浅い碗。48と49は脚付の碗。50はその脚であろう。51は裝飾付の高坏である。

第16図52は鉄剣。復元全長は22cm。茎が8.8cmと全体の40%を占める。

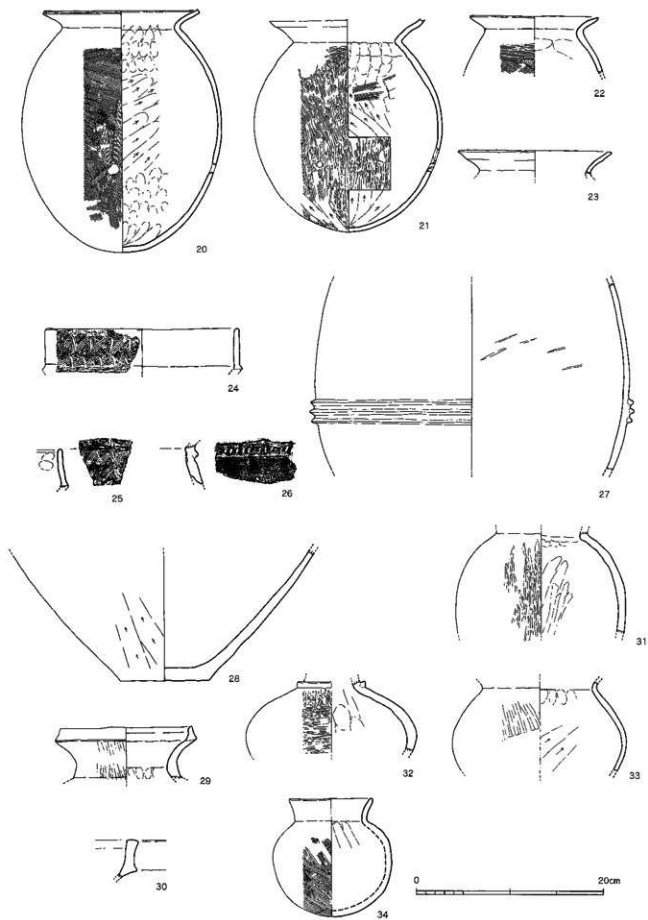
第17図53から第18図79は中世土器。53から74の坏は大きく2形態に分けることができる。53、54などのように底径と口径の比が小さいもの、60や61のようにその比が大きいものの二種である。75から78は小皿。いずれも口縁部は大きく直線的に伸びる。79は高台を張り付けた椀。いずれも15世紀代に位置付けられるものである。

第18図80から第20図98はいずれも第Ⅰ層出土のもの。出土遺物の大半は明治時代以降のものであったが、量的には少ないが江戸期以前のものを含んでいた。ここではそれらについて記す。(一部明治時代のものも含む)

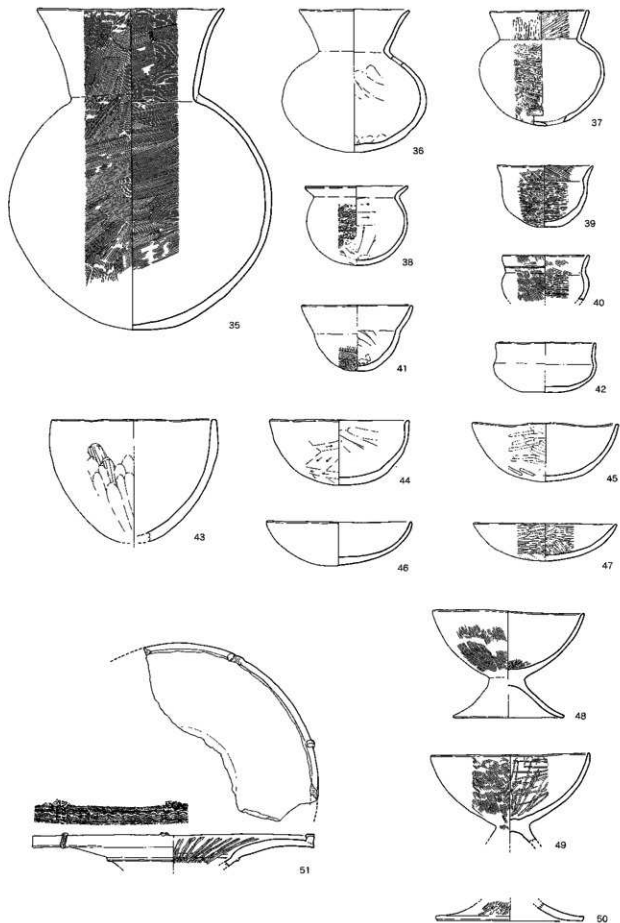
80は磁器製の植木鉢。時期は明治時代か。81から87は肥前磁器。何れも幕末から一部明治時代になる。88は明治時代の型紙刷り染め付け鉢。89は明治時代以降の壺。90は関西系陶器の土瓶。19世紀前半。第20図91から93は現在の宇佐市上高で焼かれたいわゆる高村焼の土器類である。91は甕、92は鉢(?)、93はコネ鉢である。94のほうろくもあるいは高村産かもしれない。



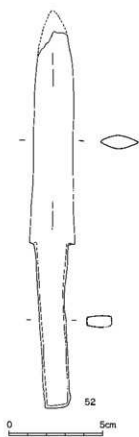
第13图 第1号洞穴出土遺物(1)



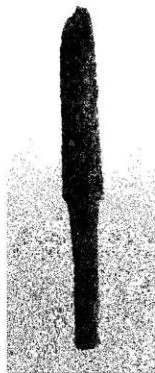
第14图 第1号洞穴出土器物(2)



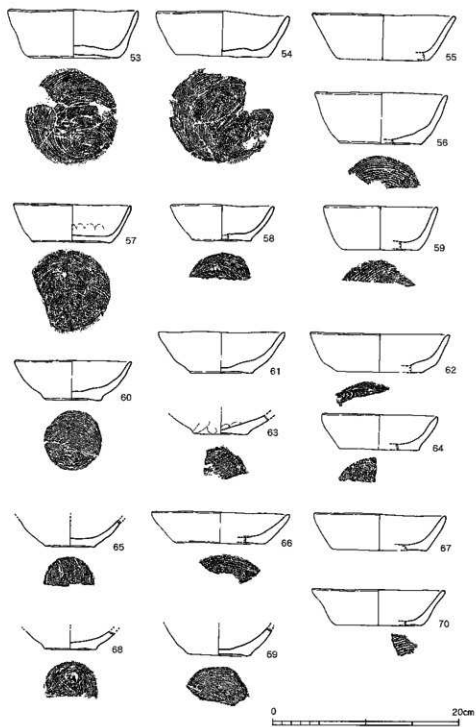
第15图 第1号洞穴出土遗物(3)



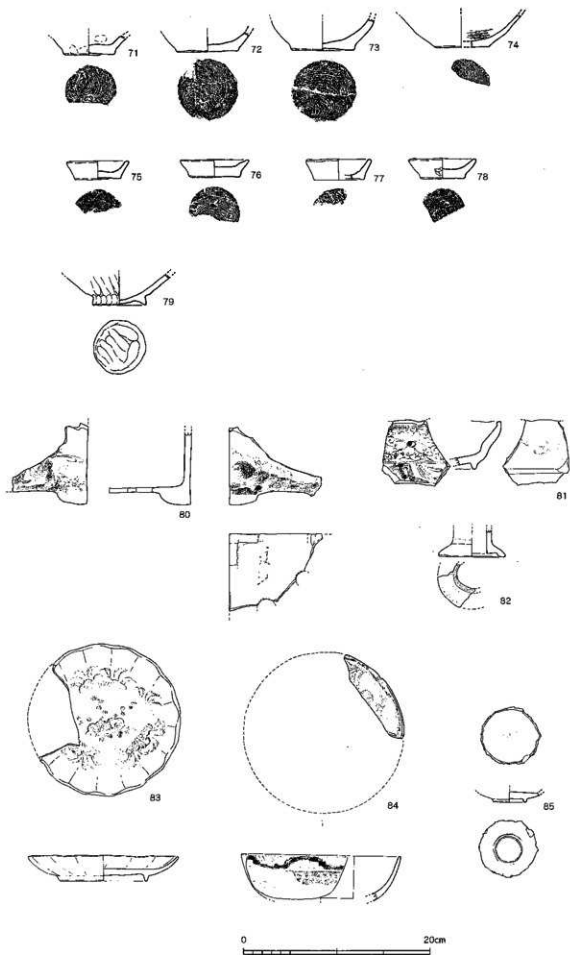
X線写真



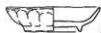
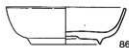
第16図 第1号洞穴出土遺物(4)



第17回 第1号洞穴出土遺物(5)



第18图 第1号洞穴出土文物(6)

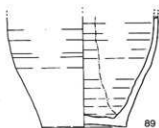


86

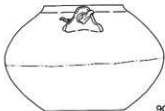
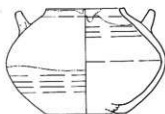
87



88



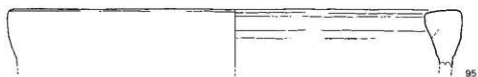
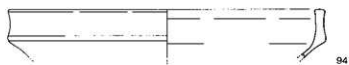
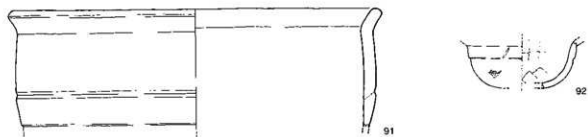
89



90



第19图 第1号洞穴出土遺物7



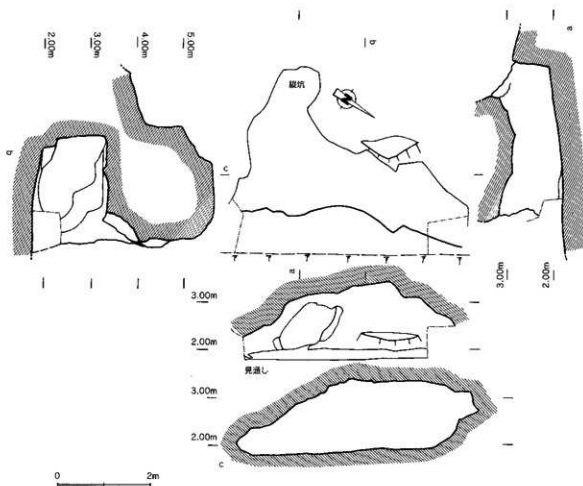
第20図 第1号洞穴出土遺物(9)

(2) 第2号洞穴

a. 概要

第1号洞穴の東側に位置する洞穴で、調査開始当時は草木に覆われ、その存在が分からなかった。第1号洞穴が遺跡であることが確認されてから、再度周辺の精査により確認されたものである。床から1mまで埋まっており、半截して掘り下げを行った。

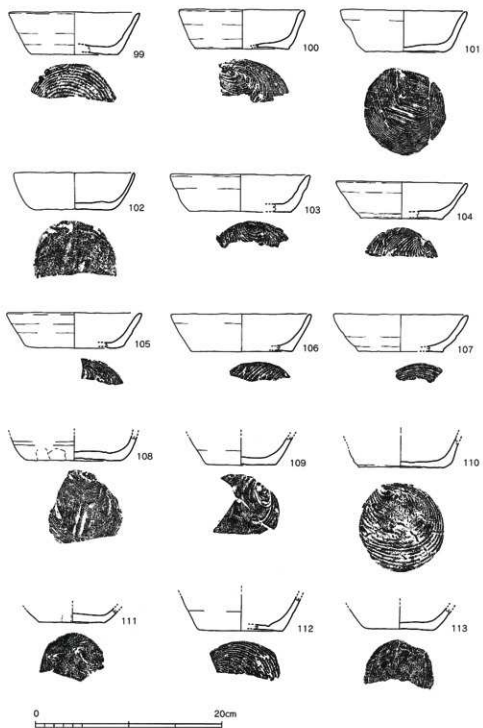
その結果、間口4.8m、高さ1.2m、奥行き1.2mの洞穴で、最奥部は縦坑によって第1号洞穴の前庭部につながっている。床面の標高は1.18mである。現在水路によって入口部が破壊されているものと考えられる。



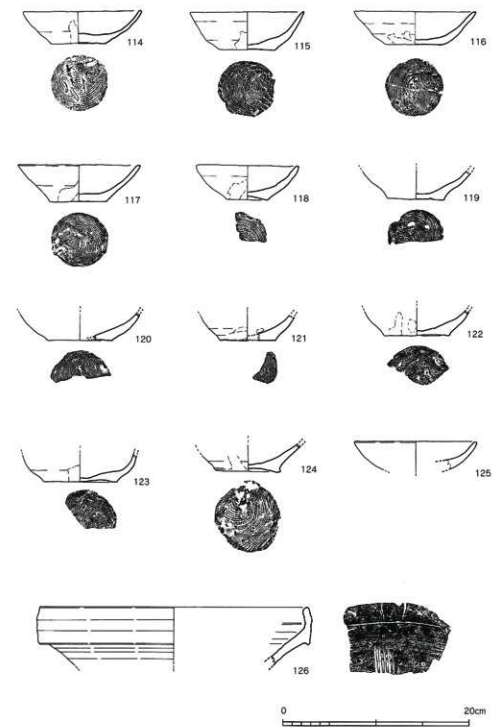
第21図 第2号洞穴平面・立面図

b. 出土遺物

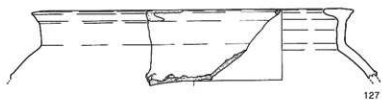
内部からは、特に第1号洞穴前庭部とつながる縦坑から流れ込んだ状態で主に中世土器が出土している。第1号洞穴出土土器と一括と考えて良い。坏は形態的に同じく2種に分けられる。126の備前焼播り鉢は15世紀である。



第22图 第2号洞穴出土遗物(1)



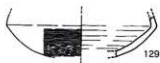
第23图 第2号洞穴出土遺物(2)



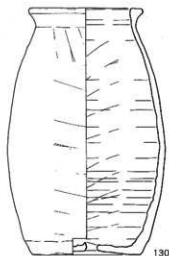
127



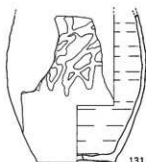
128



129



130



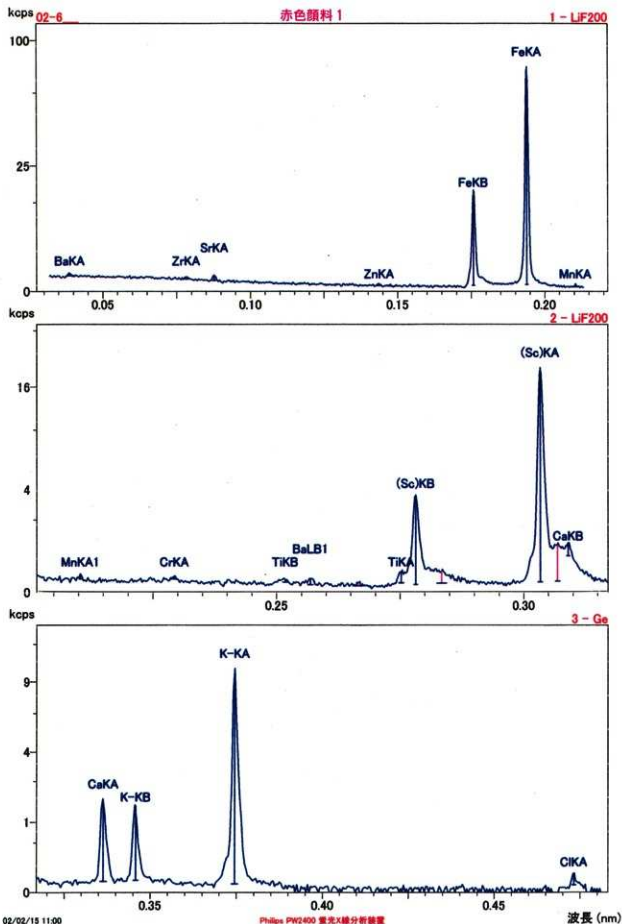
131

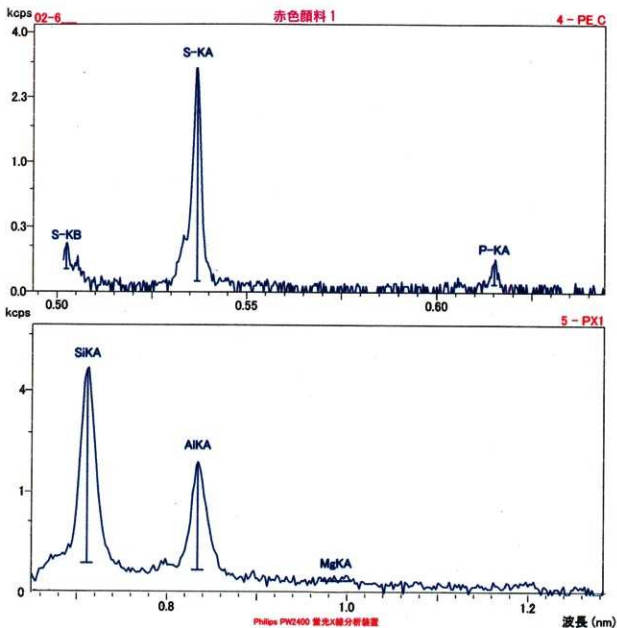


第24図 第2号洞穴出土遺物(3)

第3章 分析

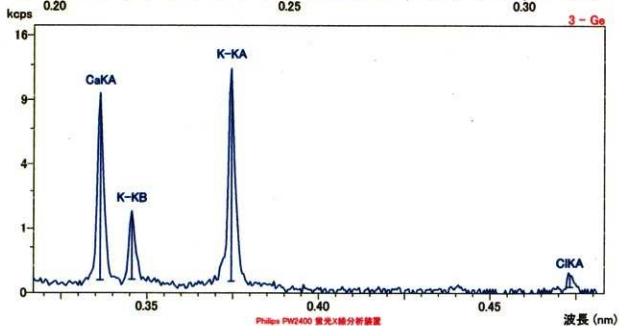
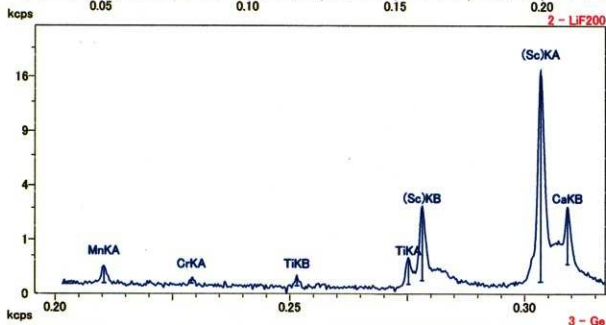
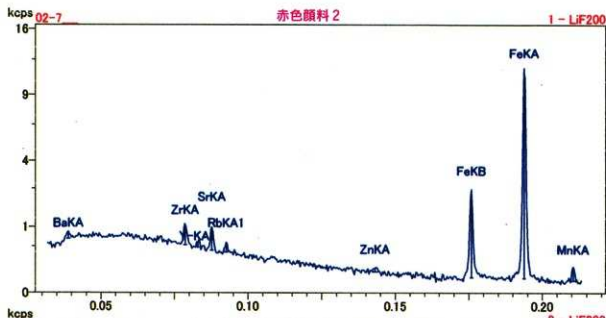
第1号洞穴の内部から採取した赤色顔料について蛍光X線分析・X線回折分析を行った。その分析結果は以下のとおりである。なお、採取位置については第12図を参照のこと。

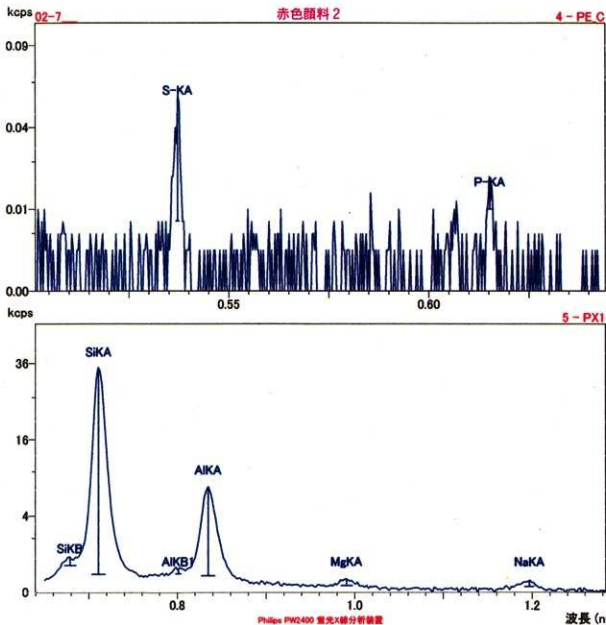




サンプルの濃度 (赤色顔料1)

化合物	濃度 (%)	化合物	濃度 (%)	化合物	濃度 (%)	化合物	濃度 (%)	化合物	濃度 (%)
1 MgO	<	SO ₃	10.133	TiO ₂	0.214	ZnO	0.027		
2 AL ₂ O ₃	5.753	CL	0.09	Cr ₂ O ₃	0.018	SrO	0.061		
3 SiO ₂	10.07	K ₂ O	2.885	MnO ₂	0.06	ZrO ₂	0.02		
4 P ₂ O ₅	0.282	CaO	0.276	Fe ₂ O ₃	69.981	BaO	0.131		



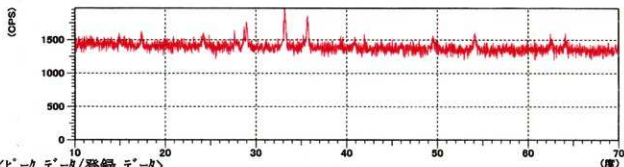


サンプルの濃度 (赤色顔料2)

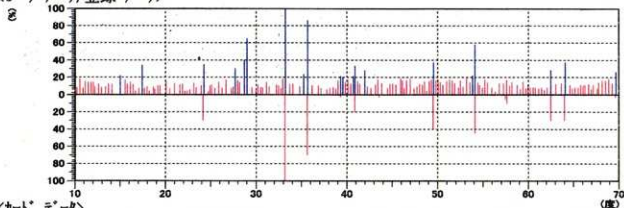
化合物	濃度 (%)	化合物	濃度 (%)	化合物	濃度 (%)	化合物	濃度 (%)	化合物	濃度 (%)
1 Na ₂ O	1.146	P ₂ O ₅	0.049	CaO	2.007	Fe ₂ O ₃	8.961	Y ₂ O ₃	0.007
2 MgO	0.44	SO ₃	0.234	TiO ₂	1.103	ZnO	0.01	ZrO ₂	0.062
3 AL ₂ O ₃	17.963	CL	0.123	Cr ₂ O ₃	0.041	Rb	0.018	BaO	0.073
4 SiO ₂	63.041	K ₂ O	4.432	MnO ₂	0.233	SrO	0.059		

赤色顔料1

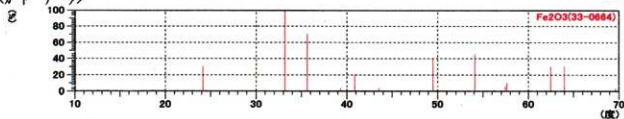
<プロファイル>



<ピークデータ/登録データ>



<カードデータ>

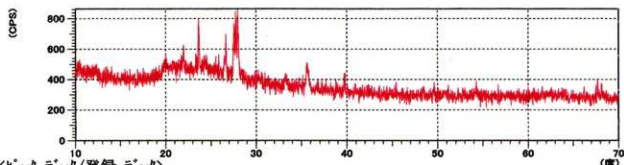


化学式
化合物名 (鉱物名)
Fe2O3
Iron Oxide (Hematite,syn)

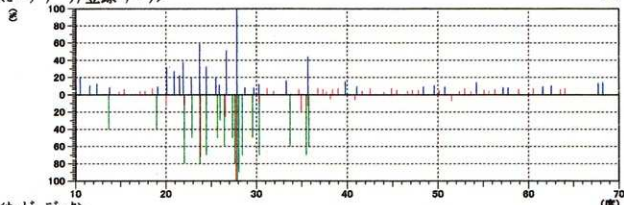
S	L	d	I	R
0.987	密度 0.667(10/45) 5.27	WT% 0.903	空間群 R-3c 0.778	0.469

赤色顔料 2

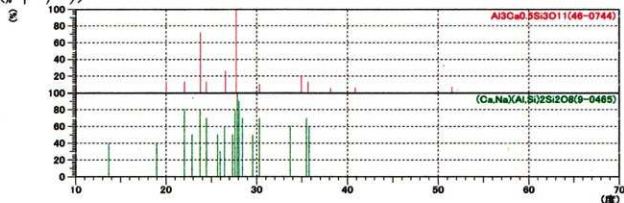
〈プロファイル〉



〈ピークデータ/登録データ〉



〈カートデータ〉



化学式 化合物名 (鉱物名)	S	L 密度	d WT%	I 空間群	R
Fe2O3	0.951	0.692 (9/13)	0.733	0.632	0.321
Calcium Aluminum Silicate (Ca,Na) (Al,Si) 2 Si2O8	0.526	0.684 (13/19)	0.721	A 2 / a	0.306
Sodium Calcium Aluminum Silicate	(Anorthi)	2.77	P-1		

赤色顔料 1 の資料については、蛍光 X 線分析では鉄のピークが高く、X 線回折分析からはベンガラが検出されており、また水銀が検出されないことから、赤色顔料としてベンガラを使用しているといえる。赤色顔料 2 については、蛍光分析では鉄のピークは低く水銀も検出されていない。また、回折分析からはベンガラの同定も粘土鉱物のピークに遮られ不確かで、ベンガラが混じているとはこのデータからはいえない。

第4章 まとめ

真那井城山遺跡は、大分県では調査例の無い古墳時代の洞穴遺跡である。洞穴自体は縄文時代前期のいわゆる縄文海進に伴って形成された海蝕洞穴と考えられるが、その洞穴の利用が始まったのは古墳時代前期であった。洞穴内部からは副葬品と考えられる一括土器と鉄器、それにベンガラがまとめて出土したことから埋葬施設が存在が推測された。残念ながら遺構としては捉えられなかったが、洞穴内部が古墳時代前期に埋葬に利用されたことは間違いないであろう。

しかし、遺物の出土は洞穴内部にとどまることなく、いわゆる前庭部にも散乱していた。このことは、この洞穴の利用が1回のみで埋葬に止まるものではなく、複数回に及ぶものであることを示している。さらに第Ⅲ層（古墳時代前期の堆積層）中に認められる焼土の存在は、前庭部において何らかの行為が複数回行われたことを示していると考えられる。また、セクションdの南壁側で認められる掘り込みは、ベンガラの存在と合わせて考えると、そこにも埋葬遺構が存在した可能性を否定できない。

次に洞穴内部の埋葬施設について考えてみよう。一括遺物は第Ⅴ層の砂層直上にあたかも置かれた状態で出土している。遺物群の上には、中世段階の堆積物が多量の礫とともに堆積していた。このことから、埋葬が、第Ⅴ層の砂層を掘り下げて土坑を作るものではなく、また上部に何らかの施設を作ったものではないと考えられる。すなわち、遺体をそのままか、あるいは木棺等に入れて洞穴最奥部に安置したものとすることができよう。

次に、洞穴前庭部が標高4.2mほど堆積した段階で、中世の利用が始まる。小皿、杯の多量廃棄である。洞穴の5mほど手前のところで、直径1mほどの範囲の中に土器がまとめて出土した。また、そこから2mほど洞穴寄りのところでは、焼土化した部分が検出されている。層位から中世のものと考えられるが、祭祀行為に伴うものであるかどうかは確認できなかった。

以上のように、この海蝕洞穴は古墳時代前期と中世後期の2時期の利用が認められた。次に、その意義について若干考えてみたい。

弥生時代から古墳時代にかけての洞穴埋葬の事例は、千葉県房総半島や神奈川県などで確認されている。特に、千葉県館山市の大寺山洞穴遺跡では「舟葬」とでも呼べる舟を棺にした埋葬が知られている。それに象徴されるように、海辺の人々は海との強い関わりを持ちながら生活していたことがうかがわれる。大分県では、国東半島沿岸部や海部郡において、古墳時代前期には大型前方後円墳や大型円墳が相次いで築造されている。背後に大きな平野を持たず、まさに海部の首長の地位にふさわしい規模の古墳を築いているのである。

瀬戸内に面する東九州は、古墳時代初期の大和政権にとっての橋頭堡として理解するよりは、この時代瀬戸内海を自由に往来した「海人」の拠点として、初期大和政権に積極的に関わりを持ったと理解した方が良いのかもしれない。

いずれにしても、古墳に葬られなかった人々の一部が、このような海岸部の洞穴に埋葬されたことを確認することが出来た点は重要である。今後、海岸部の同種洞穴には注意が必要なのは言うまでもない。

次に中世の土器群である。この「城山」の南側200mには浮島神社がある。いまでも浮島神社の境内には中世の土器が散布している。浮島神社はその名の通り、海浜部で「浮島状」になった微高地に作られており、満潮時には最近まで潮が回り込んでいたという。浮島神社は、『豊後迷見郡史』によると「村社浮島八幡社 祠は初め大神村真那井白山（或いは城山と云う）に鎮座せしを、中古海浜浮島に遷せしなり」とあることから、今回の遺物と浮島神社が何らかの繋がりを持つことが考えられるが、具体的な祭祀行為の内容も含めて、考古学的には検証ができなかった。

真那井城山遺跡出土土器観察表(1)

番号	器種	法量			胎土	調整		焼成	色調	備考
		口径	器高	底径		外面	内面			
11	甕	18.0	-	-	砂粒少ない、角四石若干	ハケ調整	上半ハケ、下半ナデ	良好	淡明褐色	
12	甕	-	-	(3.2)	角四石、石英、雲母	ハケ調整	ハケ調整	良好	灰白色	
13	甕	14.8	19.3	-	砂粒、赤色粒	ハケ調整、のち一層ナデ	上半ハケ、下半ヘラケズリ	良好	浅黄褐色	外面2箇所黒染
14	甕	-	-	-	砂粒、長石若干	細かいハケ調整	ナデ調整	良好	淡明褐色～灰白色	
15	甕	(12.6)	-	-	砂粒、長石若干	タタキ、のちハケ調整	上半ナデ、下半ナデのちハケ	良好	淡明黄褐色	
16	甕	13.7	-	-	角四石、石英、雲母、赤色粒	タタキ後ナデ	ナデ	良好	にぶい褐色	
17	甕	(15.6)	-	-	角四石、長石多い、赤色粒、砂粒含む	ハケ調整	口縁部ハケ、胴部基部ナデ	良好	褐色	
18	甕	16.1	22.0	(6.4)	角四石、赤色粒含むが、精選	ハケ調整	ハケのちヘラケズリ	良好	赤褐色	
19	甕	(15.6)	-	-	砂粒多い、角四石、長石少ない	ハケ調整	ヘラケズリ	良好	淡黄褐色	
20	甕	16.4	25.5	-	角四石、長石、砂粒含む	ハケ調整	胴部ハケナデスリ、口縁部ナデ	良好	灰白色～黄褐色	焼成後凹孔あり。
21	甕	-	-	-	角四石、石英、長石、雲母若干含む	ハケ調整	胴部3分の2ヘラケズリ、上部は精選	良好	灰褐色	胴部ヘラケ部は黒染あり、胴部口縁部は黒染あり。
22	甕	(13.6)	-	-	砂粒、角四石、長石若干	ハケ調整	ナデ調整	良好	明淡褐色	
23	甕	(16.4)	-	-	砂粒、角四石、長石若干	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡灰褐色	
24	複合口縁甕	(20.0)	-	-	角四石多い。	ヨコナデ、のち樽播成状文	ヨコナデ	良好	淡明黄褐色	外面赤彩か
25	複合口縁甕	-	-	-	砂粒、角四石、長石若干	ヨコナデ、のち樽播成状文	上半エビオサエ、下半ヨコナデ	良好	淡明黄褐色	
26	複合口縁甕	-	-	-	砂粒、角四石、長石若干	ナデ調整、胴部異常閉り分け	ナデ調整	良好	淡黄褐色	赤彩あり
27	複合口縁甕	-	-	-	砂粒、角四石、長石若干	ナデ調整、突合せ貼り付け	縦線ノミによるナデ調整	良好	淡黄白色	
28	複合口縁甕	-	-	9.6	砂粒少なく、角四石多い。	ナデ調整、基部付近ヘラケズリ	ナデ調整	良好	明淡褐色	
29	複合口縁甕	(13.6)	-	-	砂粒、角四石わずら。	ヨコナデ、胴部ハケ調整	ヨコナデ、胴部エビオサエ	良好	淡黄白色	
30	複合口縁甕	-	-	-	角四石多い。砂粒少ない。	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡褐色	
31	甕	-	-	-	砂粒、長石、角四石若干	ヘラ磨き	ナデ、胴部はエビオサエ	良好	明淡褐色～明褐色	
32	甕	-	-	-	砂粒、角四石、長石若干	ヘラ磨き	ナデ、胴部はエビオサエ	良好	淡褐色	
33	甕	-	-	-	角四石、石英、長石、雲母若干含む	ハケ調整、下半はナデ調整	ヘラケズリ	良好	淡灰褐色	
34	甕	8.6	12.4	-	砂粒、角四石、長石若干	ハケ調整、のち上半はナデ	ハケ調整	良好	淡褐色	
35	蓋口甕	(20.0)	33.8	-	角四石、石英、雲母	ハケ調整	ハケ調整	良好	淡黄色	
36	蓋口甕	(11.7)	15.0	-	石英、角四石若干	ナデ調整	ナデ調整	良好	明灰褐色	
37	小形甕	10.6	12.1	-	角四石、長石、雲母	ハケ後ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ、胴部はナデ	良好	褐色	底部焼成後凹孔
38	小形甕	11.2	8.3	-	角四石若干含むも精選	ハケ調整	ナデ、のち上ナデ	良好	赤褐色～明灰褐色	
39	小型甕	(10.2)	6.4	-	砂粒少なく、精選	口縁部ハケ、胴部ヘラ磨き	口縁部ハケ、胴部ヘラ磨き	良好	淡明黄褐色	
40	小型甕	(9.0)	-	-	砂粒少なく、精選	ハケ調整	口縁部ハケ、胴部ヘラ磨き	良好	淡黄白色	
41	小型丸底甕	11.7	6.8	-	角四石、石英、精選	ハケ調整、口縁部はヨコナデ	口縁部ヨコナデ、胴部はナデ	良好	赤褐色～灰白色	完彩
42	碗	11	5.3	-	砂粒、赤色粒	ナデ	ナデ	良好	淡黄白色	4分の3残存
43	碗	17.6	-	-	角四石、石英、雲母	ナデ、ハケ調整	ナデ	良好	褐色	
44	碗	14.8	6.8	-	砂粒少ない	ナデ、下半ヘラケズリ	ナデ調整	良好	明淡褐色	
45	碗	15.5	6.1	-	砂粒、角四石、石英含む	ナデ、のちヘラ磨き	平滑ナデ調整	良好	赤褐色	
46	碗	15.4	4.6	-	砂粒少ない	不明、ヘラケズリか?	上半ナデ調整	良好	赤褐色	
47	碗	15.2	3.9	-	角四石、長石、石英	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	浅黄褐色	口縁部一部欠
48	脚付碗	16.7	11.0	12.6	角四石、石英含むも精選	胴部ハケ調整、胴部ヨコナデ	胴部ナデ、底部ナデ	良好	黄褐色	
49	脚付碗	16.9	-	-	長石、角四石含む	ハケ調整	口縁部ハケ、のちヘラ磨き	良好	褐色～明灰褐色	外面スス付着
50	脚付碗	-	-	(15.4)	砂粒、角四石若干	ヘラ磨き	ヨコナデ	良好	黄褐色	
51	鉢鉢付高杯	(29.8)	-	-	砂粒、角四石、長石若干	ナデ調整、胴部調整あり、赤彩あり。	ヘラ磨き	良好	明淡黄褐色	片文は2個1単位

() 内は復元した数値

真那井城山遺跡出土土器観察表(2)

番号	器種	口径	底径	器高	胎土	釉成	色調	備考
53	坏	(13.6)	9.2	5.0	砂粒、角閃石少ない。	良好	明淡灰茶白色	底部糸切り
54	坏	13.6	10.0	4.5	砂粒、角閃石少ない。	良好	明淡灰茶白色	底部糸切り
55	坏	(15.0)	(9.4)	4.8	砂粒、角閃石少ない。	良好	淡灰褐色	底部糸切り
56	坏	(13.6)	(8.8)	5.3	砂粒、角閃石少ない。	良好	明淡褐色	底部糸切り
57	坏	12.4	8.4	3.9	砂粒、角閃石少ない。	良好	明淡茶色	底部糸切り
58	坏	(10.8)	(6.2)	3.7	砂粒、角閃石少ない。	良好	明淡黄褐色	底部糸切り
59	坏	(11.8)	(8.0)	4.5	砂粒、角閃石少ない。	良好	淡明灰白色	底部糸切り
60	坏	12.3	6.3	4.1	砂粒、角閃石多い。	良好	淡明褐色	底部糸切り
61	坏	(13.4)	6.4	4.2	精漉されている。	良好	淡明褐色	底部糸切り
62	坏	(14.8)	(9.2)	4.0	砂粒、角閃石少ない。	良好	明淡茶白色	底部糸切り
63	坏	—	(5.8)	—	砂粒、角閃石少ない。	良好	明淡褐色	底部糸切り
64	坏	12.2	8.4	3.7	砂粒、角閃石少ない。	良好	淡赤褐色	底部糸切り
65	坏	—	(3.2)	—	砂粒、角閃石少ない。	良好	明褐色	底部糸切り
66	坏	(14.4)	(9.4)	6.4	砂粒、角閃石少ない。	良好	明淡茶白色	底部糸切り
67	坏	(13.6)	(10.0)	3.7	砂粒、角閃石少ない。	良好	明淡褐色	底部糸切り
68	坏	—	(5.6)	—	砂粒、角閃石少ない。	良好	明茶褐色	底部糸切り
69	坏	—	(6.6)	—	精漉されている。	良好	淡黄褐色	底部糸切り
70	坏	(14.0)	9.2	3.7	砂粒、角閃石少ない。	良好	淡褐色	底部糸切り
71	坏	—	(5.2)	—	砂粒、角閃石少ない。	良好	明褐色	底部糸切り
72	坏	—	6.4	—	砂粒、角閃石少ない。	良好	明褐色	底部糸切り
73	坏	—	(6.6)	—	砂粒、角閃石少ない。	良好	明褐色	底部糸切り
74	坏	—	(5.8)	—	砂粒、角閃石少ない。	良好	底部糸切り	底部糸切り
75	小皿	(5.4)	(4.8)	1.9	砂粒、角閃石少ない。	良好	暗赤褐色	底部糸切り
76	小皿	7.2	5.2	1.8	砂粒、角閃石少ない。	良好	明褐色	底部糸切り
77	小皿	(6.8)	(5.4)	2.1	砂粒、角閃石少ない。	良好	明茶色	底部糸切り
78	小皿	7.8	4.6	2.1	砂粒、角閃石少ない。	良好	明灰茶白色	底部糸切り
99	坏	(13.8)	9.2	4.4	砂粒、赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡灰褐色	底部糸切り
100	坏	(13.0)	10.0	4.1	砂粒、赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡灰黄褐色	底部糸切り
101	坏	13.4	8.5	4.3	砂粒、赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡灰黄褐色	底部糸切り
102	坏	12.8	8.3	3.8	砂粒、角閃石、長石多い。	良好	淡灰褐色	底部糸切り
103	坏	(15.0)	10.8	3.9	砂粒、赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡灰黄褐色	底部糸切り
104	坏	13.8	(8.8)	3.8	砂粒、赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡灰黄褐色	底部糸切り
105	坏	(14.4)	(10.6)	3.7	砂粒、赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡灰黄褐色	底部糸切り
106	坏	(14.8)	10.8	4.0	砂粒、角閃石、長石、赤色粒多い。	良好	淡灰黄褐色	底部糸切り
107	坏	(14.2)	9.0	3.9	砂粒、赤色粒多い。	良好	淡灰黄色	底部糸切り
108	坏	—	(9.8)	—	砂粒、赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡灰褐色	底部糸切り
109	坏	—	(7.4)	—	砂粒、赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡灰褐色	底部糸切り
110	坏	—	9.0	—	砂粒、赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡灰褐色	底部糸切り
111	坏	—	(7.0)	—	砂粒、赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡褐色	底部糸切り
112	坏	—	(8.8)	—	砂粒、赤色粒、角閃石多い。	良好	淡黄褐色	底部糸切り
113	坏	—	(7.2)	—	砂粒、角閃石少ない。	良好	淡灰茶褐色	底部糸切り
114	坏	12.8	5.8	3.4	砂粒、角閃石少ない。	良好	淡灰褐色	底部糸切り
115	坏	12.2	5.8	4.0	砂粒、角閃石少ない。	良好	淡灰褐色	底部糸切り
116	坏	(13.0)	6.0	4.0	砂粒、角閃石少ない。	良好	淡灰褐色	底部糸切り
117	坏	(13.0)	6.0	3.9	砂粒、角閃石少ない。	良好	淡灰黄褐色	底部糸切り
118	坏	(10.8)	4.4	3.6	砂粒、角閃石多い。	良好	淡灰黄褐色	底部糸切り
119	坏	—	(6.0)	—	砂粒、赤色粒多い。	良好	淡褐色	底部糸切り
120	坏	—	(7.0)	—	赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡褐色	底部糸切り
121	坏	—	(5.8)	—	砂粒、黒色粒、赤色粒多い。	良好	淡褐色	底部糸切り
122	坏	—	7.0	—	砂粒、赤色粒、長石多い。	良好	淡灰褐色	底部糸切り
123	坏	—	(7.8)	—	砂粒、角閃石少ない。	良好	淡灰黄褐色	底部糸切り
124	坏	—	6.8	—	砂粒、角閃石少ない。	良好	淡黄褐色	底部糸切り
125	坏	(13.0)	—	—	砂粒、赤色粒、角閃石、長石多い。	良好	淡灰黄褐色	底部糸切り

() 内は復元した数値

写 真 图 版



選跡風景
中央やや左下が選跡

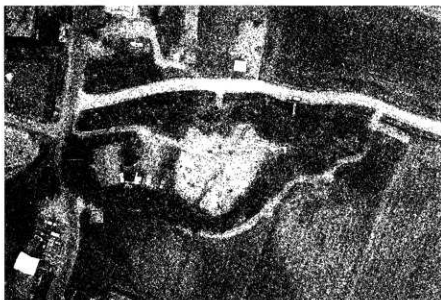


第 1 号洞穴完掘状况



第 1 号洞穴遗物出土状况

遺跡空中写真
(上が北方向)



城山地区調査前



城山地区表土はぎ





城山地区
塚状の高まり



第1号洞穴
調査前の状況

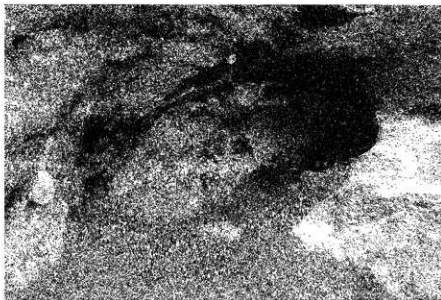


第1号洞穴
調査風景

第1号洞穴
調査風景

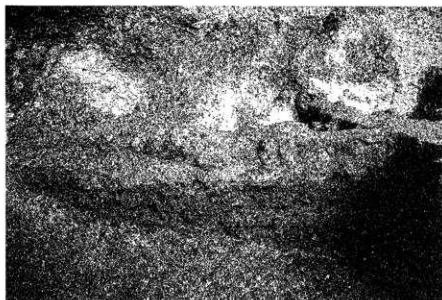


第1号洞穴

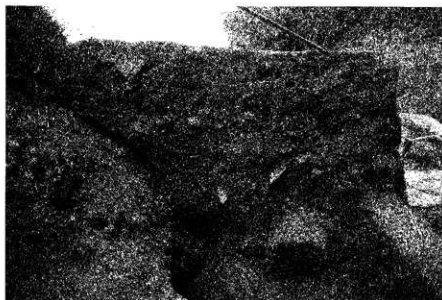


第1号洞穴
セクションaの中程
の状況

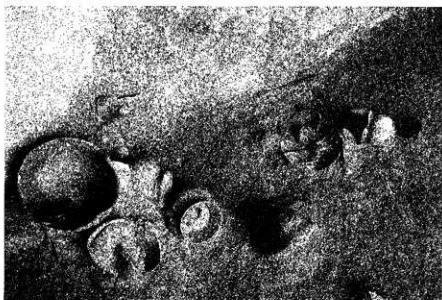




第1号洞穴
セクションc



第1号洞穴
セクションg



第1号洞穴
最奥部遺物出土状況

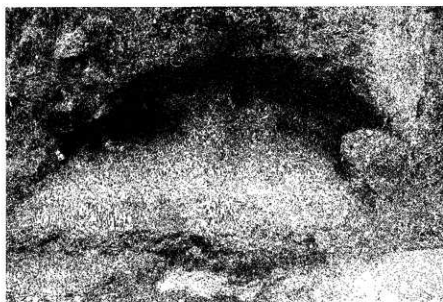
第1号洞穴
完掘状況

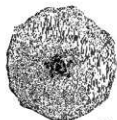
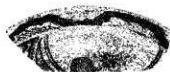
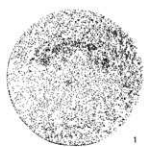


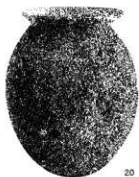
第1号洞穴
完掘状況
(洞穴内から)



第2号洞穴









38



39



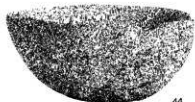
41



42



43



44



45



46



47



48



49



報 告 書 抄 録

ふりがな	まないしろやまいせき							
書名	真那井城山遺跡							
副書名	県道日出真那井柵築線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	大分県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第147輯							
編著者名	小柳和宏、山田拓伸							
編集機関	大分県教育庁文化課							
所在地	〒870-8503 大分県大分市府内町3丁目10-1 TEL 097-536-1111							
発行年月日	2002年3月29日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まないしろやまいせき 真那井城山遺跡	はやみごころにまら 速見郡日出町大字 まないしろや 真那井字塩屋	443417	220096	33°22'30"	131°35'30"	980825 : 981224	1,000m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
真那井城山遺跡	洞穴	古墳時代 中世	墓	土器類、鉄剣 土器類				

大分県文化財調査報告書 第147輯

真那井城山遺跡

— 県道日出真那井杵築線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2002年3月29日

発行 大分県教育委員会
〒870 - 8503 大分市府内町3丁目10-1
TEL 097 - 536 - 1111 (内5498)
印刷 (株)明文堂印刷
